國學院大學学術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

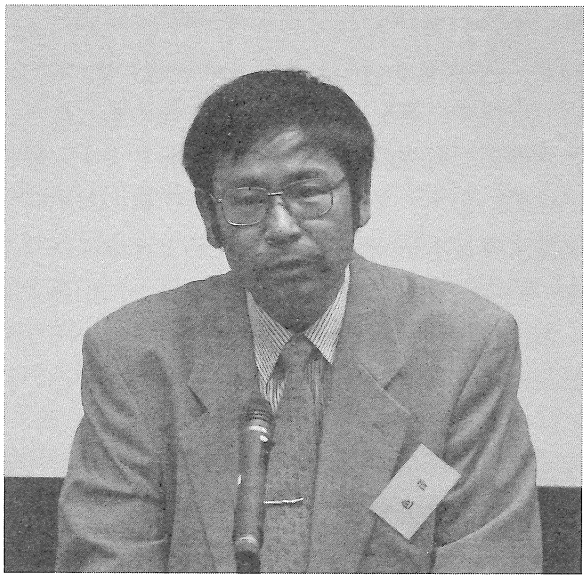
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウェン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション2

中国における神道及び日本文化研究のネット化の必要性と可能性

色音

中国 北京師範大学文学院民族與社会発展研究所教授



【司会（浅野）】　本日のお二方目、中国からお出でいただきました色音先生から、「中国における神道及び日本文化研究のネット化の必要性と可能性」ということで、発題をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

発題

色音

【色音】　紹介していただいた色音と申します。北京師範大学に勤めております。今回、準備がちょっと非常に緊迫したなかでしたので、いろいろ不具合があると思いますが、パワーポイントを使いながら、「中国における神道及び日本文化研究のネット化の必要性と可能性」というテーマで話したいと思います。

最初に、今の中国における日本研究の現状について、どういう研究機関があるか、どのような研究組織があるかということを少し紹介させていただきまして、その後、２番目に、中国の中の神道に関する研究者たち、あるいは日本文化研究者のネットワークをつくる必要性という内容について少し話したいと思います。３番目に、ネット化の可能性と、どういう可能性があるかということを少しお話しします。４番目として、そのネット化の役割と意味について話して、最後に具体的な方案というか、具体的なやり方について、僕が考えたところを少し紹介したいと思います。

それで最初のところで、「中国における日本研究の現状」について話したいと思います。

今、中国における「研究機関の概況」という形でまとめましたが、中国の各大学、各研究機関にいろいろな日本関係の研究機関ができてきております。最初に、大学所属研究機関について紹介したいと思います。今できている大学所属の日本研究機関は、非常に大きな研究機関としては南開大学日本研究院というところで天津にありますが、そこは非常にいろいろな側面で日本の研究を進めております。そのほかに山西大学日本研究センター、遼寧大学日本研究所、浙江工商大学日本文化研究所等、いろいろなところがあります。特にこの浙江工商大学は最近になって、特に日本文化を中心にいろいろな研究を進めております（表１）。

まだこんなにたくさんありますが、あとは山東大学日本研究センター、南京大学中日文化研究センター、上海にある復旦大学という有名な大学ですが、そこの日本研究センターがあります。また北京大学、河北大学、華東師範大学――華東師範大学も上海にありまして、華東師範大学所属の中日関係研究センターが有名です。また東北のほうでは、大連大学の日本言語文化研究センターとかがありまして、北京のほうでも、中国農業大学に中日食品研究センターとか、いろいろあります。吉林大学の東北アジア研究院も、かなり大きい機関でありまして、その中に日本研究とロシア研究とかがありまして、あと、東北アジアの国々の研究がよく行われています。これが日本のＣＯＥとよく似ている国家教育委員

南開大学日本研究院	中国人民大学日本研究中心
山西大学日本研究中心	北京大学日本文化研究所
遼寧大学日本研究所	北京第二外国語学院日本研究所
浙江工商大学日本文化研究所	延辺大学中朝韓日文化比較研究中心
山東大学日本研究中心	大連民族学院日本研究所
南京大学中日文化研究中心	大連大学日本言語文化研究中心
復旦大学日本研究中心	華東師範大学日本研究中心
北京外国語大学日本学研究中心	上海音楽学院中日音楽研究中心
河北大学日本研究所	吉林大学日本研究所
華東師範大学日本中日関係研究中心	河南大学日本研究所
大連大学日本語言文化学院	華東師範大学日本教育研究所
中国農業大学中日食品研究中心	上海外国語大学日本研究中心
吉林大学東北亜研究院	同済大学日本学研究所
東北師範大学日本研究所	広州中山大学日本研究中心
湖南大学日本文化研究所	広州中山大学華南日本研究所
湖南大学亜太研究中心	青島大学日本研究中心

表１　大学所属日本研究機関

会所属の重点研究機関です。だから、いろいろと十分な費用を持っておりまして、東北アジアの研究を進めております。ただ、ここも政治、経済、国際関係とか、そういうところに中心をおいておりまして、文化の側面では、そんなに研究は進んでいません。その他、東北師範大学というのは、かなり古い歴史を持っていて、日本語教育では非常に実力を持っている大学です。

このような機関はこんなにたくさんありますが、ちょっと飛ばして、最近、また中国人民大学とか、かなり有名な大学の中でも、新しく日本研究センターができております。あと、北京大学の日本文化研究所も、かなり実力を持っております。

そのほかにこんなにたくさんありまして、南のほうでも、中山大学の日本研究センターとか、こういうものがいろいろあります。

また、これらは大学所属の研究所でありまして、その他、中国では社会科学院という組織があって、中央レベルの中国社会科学院と、地方（省）ごとに社会科学院を持っております。各社会科学院の中でも日本研究を進めているところがありまして、例えば中国社会科学院の中で日本研究所という、かなり大きな研究所があります。職員が大体 60 人ぐらいいまして、今までは政治、経済とかが中心に研究されておりましたが、最近４、５年ぐらい、文化のほうでもかなり研究を進めているようです。あと、天津とか、そのほかに社会科学院の中でも日本歴史文化研究センターとか、あと中日経済研究センター、中日歴史研究センターがあります。中国社会科学院中日歴史研究センターというのは、日本との中

日友好協会が一緒につくったもので、かなりたくさんの資料を出しております。このセンターは、やはり近代以来の中日関係を中心に研究活動を行っております。こんなにたくさんあります（表２）。

中国社会科学院日本研究所	上海社会科学院亜太研究所
天津社会科学院亜太研究所	上海国際問題研究所
中国社会科学院日本歴史與文化研究中心	天津現代日本研究所
中国社会科学院中日経済研究中心	吉林省社会科学院日本研究所
中国社会科学院中日歴史研究中心	黒龍江省社会科学院日本問題研究中心

表２　社会科学院所属日本研究機関

そのほかにも、日本研究学会組織があります。中華日本学会とかが一番全国的な大きな学会でして、また中日関係史学会とか、あと、地方にも、そういうような学会があります。そのほかにも、今、ホームページとか、いろいろつくっているところもあります（表３）。

中国中日関係史学会	北京市中日関係史学会
中華日本学会	中国日本文学研究会
浙江省中日関係史学会	中国日本哲学研究会
東北地区中日関係史学会	中国日本経済学会
中国日本史学会	上海市日本学会

表３　日本研究学会組織

今、中国の中でも、北京に日本学センターという研究機関がありまして、そこの学者たちが、中国の中で、どういう研究者、どういう研究結果があるか、それを統計した一覧表があります。それを見ますと、こういうふうにいろいろな研究所の一覧をつくっておりまして、これがたくさんありまして、１ページから 50 ページまであります。だから、こんなにたくさんの研究機関ができていることがわかります。

それで、２番目に「ネット化の必要性」という内容について、少し話したいと思います。

先ほど紹介したように、中国の中ではたくさんの研究機関、研究組織ができております。それで、こういう研究所の今の状態は、大体ほとんどそれぞれの研究所が、自分なりに自分の研究だけをしておりまして、お互いの交流、情報の交換・交流というのはあまり進んでいない状態です。それで共同研究とかもあまりなくて、それぞれの機関が勝手に自分でやっているわけです。だから、こういう状態で存在している問題としては、情報があまり通じないために非常に重なったプロジェクトが行われて、同じことをいろいろなところでやっているというのが現状です。また、あまり共同研究もないので、非常に低いレベルというか、研究が繰り返されております。

それで、この必要性ということは、この中で主に今日のシンポジウムは神道関係のシンポジウムですので、神道研究に対して、宗教研究で非常に権威的な研究センターをつくればいいだろうと思っております。それによって、全国の神道関係の研究者、とりあえず中国国内のネットワークをつくればいいだろうと思っております。日本文化のほうでいっても、今、あまりネットワーク化が進んでいないし、特に神道の研究は、かなりの人がやっているのだけれども、そういうネットワークがないために、非常に類似したテーマや同じことをたくさんの人たちが研究しておりまして、発表した論文も内容的には非常に同じものが多いという感じです。

それで、神道研究の状況から見たら、今、少ないかと言いましたが、それほど少ないわけではないです。中国には検索システムがありまして、いろいろな雑誌の論文をまとめたホームページがありまして、データベースみたいなものがあります。それに「神道」というキーワード、「神社」というキーワードとかを入れて検索したら、かなり多くの論文が出てくるのですね。今覚えているところでは、「神道」というキーワードで検索したら91件の論文が出てきます。これはほとんど正式な学術研究の雑誌に出ている論文ですね。だから、神道に関係する論文はかなりあるということがわかります。そこで、こういうたくさんの関心を持っている学者たちを、低いレベルで繰り返して研究するより、何とか共同研究とかをして情報交換とかをよくすれば、より効率的な研究ができるのではないかと思っております。

それで「ネット化の可能性」ということですが、中国で可能性というか、とりあえず神道研究の基礎というのが今はある程度あり、先ほど紹介したように論文もたくさんありまして、また今まで神道研究という名前をつけた本が4冊ぐらいあって、あと神社研究の本もあります。だから、ある程度基礎があるのですね。だから、この基礎を踏まえて、次の段階として、こういう研究者たちのネットワークをつくって、計画的にプロジェクトとかを進めていけば、何とかできるのではないかというのが僕の考えです。

それで、「ネット化の役割と意味」というのが、とりあえず先ほども紹介したように、中国国内のネットワークの形成を目指しています。

今、中国の中の神道研究の問題点というか、神社の検索の問題点というのが、「神社」というキーワードで検索したら、たくさん出てきますが、皆さん、ここに見えるように、ほとんどが靖国神社とかが多いのです。先ほど魯先生も紹介していたように、韓国でもそういうイメージが強いみたいに、中国の中でも、マスコミもいろいろな面で、こういう問題に焦点を当てているので、学者たちも、そういう問題に非常に関心を持って、圧倒的に多いです。だから、立場も大体は批判的な立場、あるいは先ほど魯先生もおっしゃったように非常に偏見的で、神道というものは悪いものだというイメージがあります。

それでまたパワーポイントに移りますが、これが今出ている本の表紙ですね。これが『日本神道』という本で、これは僕が一般向けに書いた薄い本で、中国の場合は神道教と、宗教の「教」をつけるのですが。「神道」だけでは、普通の人はあまりわからない。宗教の「教」をつければ、これは宗教だということがわかります。それで、神道教と書きます。それで、

『当代神道教』という本が出版されております。また靖国神社の本も出ております。

それで、ネット上でも神道というものが非常に悪いということになっており、神社といえば靖国神社を思い出すぐらいの状態です。だから、神道への批判というのは、小泉首相の靖国参拝問題もありまして、この写真のようにインターネットで流れている写真がありまして、非常に小泉に対する悪いイメージをつくっているのですね。小泉が具体的に中国人に何か悪いことをしたかといったら、そんなことは実際にはないのだけれども、やはり主な原因は靖国参拝が原因だと思いますね。だから、この名前を見たら、ちょうど「小犬蠢一狼（こいずみじゅんいちろう）」と発音に当てて、悪い意味、中国で「小泉」の発音はシャオチュアンといいますが、同じ発音の「チュアン」と発音する「犬」という文字を当てて、また「純一郎」の「純」に、ばかという意味を持っている同じ発音の文字を当てて、「郎」というところには「狼」という字を当てて、非常に悪いイメージで流れているのですね。だから、こういう状態の中で、中国の国民に神道というもの全体の姿を伝える必要性が非常にあると思っています。

それで、できれば神道全般を非常に客観的に紹介した研究成果とかを翻訳して、紹介したり、また神道の正しいイメージとかを中国国民に伝えることが非常に意味を持っていると思います。その中で、今、皆さんもご存じのように、政治レベルでは中日関係は、ますます悪化していっているところですが、実際に国民の普通の民衆は、そんなに悪いイメージは持っていないけれども、やはり政治レベルで非常に悪化していっているのですね。その中で、基礎的文化の紹介で、民衆レベルで、民間レベルで中日関係を促進することが非常に重要だと思います。その中で、神道研究とかのイメージを変えることは非常に重要だと思います。

それで最後に、具体的な方案についてどうすればいいかということを、今回は非常に少ない時間で準備しましたので、ちゃんとできていませんが、大体今考えていることは、先ほど紹介したように、神道の研究はかなりやっているところが増えておりますが、中国の中では、神道の研究にはまた困難さがあります。やはりちょっと敏感な問題で、特に植民地時代のイデオロギーとして国家神道をよく中国で布教したことなどがあり、いろいろ問題があります。だから、植民地批判の中の一部として神道の批判も含まれております。だから、こういう研究は、今のところは敏感な問題で難しさがあります。だから、非常に客観的な研究をするためには、何か緩やかなやり方でやれば少しずつ進んでいくのではないかと思っております。

例えば中国に神道研究センターとかをつくろうとしても、神道研究センターだけでは創立するのは難しいと思います。その許可が下りるのが非常に難しいと思います。だから、何とかの形で神道と日本民俗、あるいは神道と日本文化研究センターとか、そういう名前で、そういうセンターをつくって少しずつやり始めれば、何とかできるだろうと思っています。だから、先ほども話したように、必要性はあって非常に必要ですが、どういうやり方ですれば、やりやすいかということを、今のところ、考える必要があります。

それで、こういう１つの研究センターができたら、このセンターを中心に全国の、先ほ

ど紹介したように、たくさんの学者が関心を持っているのですね。こういう関心を持っている、今までもある程度基礎のある学者たちを、このセンターの客員研究員か何かの形で招待して、また一緒に共同研究のプロジェクトとかをつくれば、いい形で進めていけると思います。

この共同研究制度というのは、今のところ、中国ではあまりないのですね。日本では、これが非常に優れた研究システムになっていて、同じ問題に基礎がある学者が集まって研究を進めるというのは非常にいいやり方です。今のところ、中国には、このような形はあまりないのです。例えば大きな科研とかのプロジェクトをつくるときに、臨時的にだれかが代表として申請して、また臨時的にあまりに基礎のない人でも知り合いの人を呼んで、参加してもらうとか、あまり基礎がないから、一番基礎的なところから、たくさんの時間がかかって、もたもたと仕事が進むわけですね。だから、今のところ、神道だけではなくて、日本の優れたところとして共同研究制度というものが中国にも必要だと思います。ただ、それの難しさは、日本の場合は新幹線とかで非常に便利だけれども、中国は広いし、遠いから、そんな余分な難しさがあります。

それで３番目に、またセンターをつくるかどうかとともに、なんらかの形で神道研究のホームページとかを中国語でつくったら、読む人が増えてくると思います。特に若者は非常によくホームページを読んでいますから、そういう専門的なホームページがありましたら、非常に役に立つと思います。それで、このホームページに先ほど紹介したように、91件の論文もある中から、いいものを選んで、また１つのホームページにまとめて流すとか、そういうことも必要だし、またホームページに神道関係の論文を募集して、あるいは日本語から翻訳して紹介するとか、いろいろな形が可能だと思います。

それでもう１つ、中国で今のところ僕が考えているところは、先ほど魯先生のほうからもおっしゃったように、とりあえず日本の研究者の研究成果で非常に神道に対していい研究成果を選んで、中国語に翻訳して出版することも必要だし、また必要であれば、中国語で書かれた神道関係の論文とかを、一部選んで翻訳して、日本に流すとかということもいいと思います。僕も少し 91 件の中から一部読んでみたのですが、日本とかなり違った視点から研究している方々もおりまして、そういう視点を日本に紹介したほうがいいかもしれないと。

それでもう１つ考えていることは、今、中国でできることでは、神道研究学術討論会とか、シンポジウムみたいなもの、あるいはフォーラムみたいな形で開催できれば、もっと多くの人たちに聞いてもらえます。例えば、こういうシンポジウムを、いつも日本でやるのではなくて、韓国とか、中国とかで順番で開催したら、地元の多くの関心を持っている人たちも聞きに来るとか、それによって若手の研究者を養成するとかという可能性があるのではないかと思います。

そのほかにまた、今、国学院大学で非常に力を入れてやっている国際的発信という問題を考えると、ただの学術的な成果の発信ではなくて、国際的に神道に対して理解してもらう、もっと正しい神道のイメージを伝えるという立場から見ると、一般向けの文化的な、

神道文化の展示とかも必要ではないかと思います。ただ、こういうことができるかどうかは、韓国なんかは可能性がおありかもしれないけれども、中国では、こういう展示は難しさがあることはあるのですね。ただ、例えば日本大使館とかを通じて、中日文化交流の一項目としてやれば、何とかできるのではないかと思います。

それで、今、いろいろ具体的な方案がありますが、これを実現させるための費用的な問題も考えなくてはいけない。これらの考えがあっても、費用のところからできるかという問題を考えないと予定どおりできないですね。例えば国際フォーラムとかを開催する場合は、かなり費用も要るし。だから、何とか、そういう研究助成金、あるいは出版助成金、例えば日本語から神道研究の本を翻訳したりすると、出版助成金とかも必要だと思いますね。そういう面でやっていけば何とかできるのではないかと思っております。

あまりまとまった話ではないですが、以上で発表を終わらせていただきます。

質疑応答

【司会】　どうもありがとうございました。中国の日本研究の現状から、中国国内でのネットワークの確立の必要性、そしてそのプランということをお示しいただいたと思います。そうした中国国内でのネットワークができ上がると、また日中のネットワークの確立の上でも大変ありがたいことだと思います。そういうようなプランをお示しいただいたと思います。

色音先生のお話に対しまして質疑が何かございましたら、よろしくお願いいたします。

【黒崎】　国学院大学の黒崎と申します。先ほどの魯成煥先生のところでも、若干、国家神道に対する反発といいますか、批判といいますか、そういうところが１つの大きなネックになっているという話がありました。それで、先ほどのネットで検索した結果の画面がありましたが、それなどを見ると、そういった批判的な分野の日本研究というのは、大体、政治・経済とか、外交問題とか、そういうジャンルでの専門的な研究が、ある意味では非常に前面に出ているという部分があるのではないかという気がします。そうではなくて、例えば民俗芸能ですとか、いろいろな芸術ですとか、例えば中国でいうと「気」などの身体技法ですとか、そういった面での日中研究交流みたいなものが、伝統的な文化の中での日中研究交流みたいなものの可能性。つまり枠組みというのはいろいろあると思うのですが、その中で何がお互いに共有されて研究が進んでいくのかという部分の中身ですね。そういった面で引っかかってくる部分がないのかどうか。これは「神道」というキーワードで検索すると、今のような外交問題を扱ったようなものがかなり出てくるという結果になっていると思うのですが、もうちょっと対象の枠を少しずらしてみるとか、あるいは広げてみるという形で、日本の伝統文化といいますか、信仰を中心とした伝統文化というものの共同研究みたいなものの１つのジャンルといいますか、そういうものを確立する可能性について、何か色音先生のほうでアイデアとか、お考えがあれば、お伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【色音】　非常に少ない時間で準備をしまして、キーワードは２つしか選んで検索しなかったのですが、実際に日本文化とか、日本民俗というキーワードで検索したら、もっとたくさんの論文が出てくるはずです。実際には今のところ進んでいるところは、ある程度進んでおります。例えば中日民俗の交流、伝統民俗、風俗、習俗の交流とか、そういう本も出ております。非常に薄い本ですが、今から 10 年前に１冊、遼寧大学の先生が書かれた本が出ております。その中では、伝統的な祭りとか、芸能の関係とか、そういうものがあります。それで、浙江工商大学と今は亡くなられた宮田登先生を中心に共同研究をしまして、中日文化交流シリーズというものを出しまして、その中に民俗と宗教と、もう一つ、文学と３冊ぐらい既に出版されております。

だから、あることはある程度あるのですね。ただ、その流れの中で比率的には少ない。これからは非常に関心を持っている人が増えてくると思います。そういう中で、僕もやり

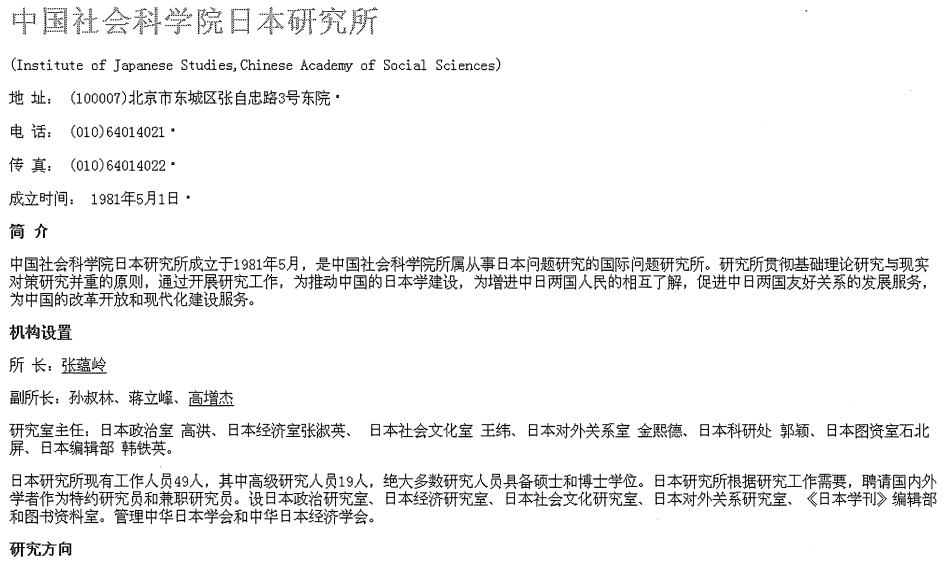
たい気持ちを持って、今、研究所から大学に移ったので、とりあえず授業の中身は、そういう日本の習慣、特に神道とかについて紹介しています。それで、今、北京大学にも、日本民俗学概論というものをつくっております。北京大学に日本語学部がありまして、その担当者が僕の友達で、今つくっているという話を聞きました。だから、だんだん進んでいくと思います。

【司会】　ありがとうございました。ほかにどなたかいらっしゃいますか。お願いいたします。

【稲場】　神戸大学の稲場と申します。私は中国に行ったことがないのですが、先ほどのリストを見せていただいて、日本研究がいろいろなところで行われているというのを教えていただきまして非常に驚いたと同時に、共同研究がない、ネットワークがつくられていないということにも驚いたのですが、そのことに関して２つお聞きしたいと思います。

先ほど、雑誌・論文のデータベースができたと。それが何年ぐらいのことなのかと。そして、論文のテーマの重複もあるということでしたが、研究者はどういった資料をもとに研究をされて論文を書かれているのか。もちろん研究論文なので、いろいろな論文や資料を参照すると思うのですが、それがお互いにそういった論文同士の参照・引用がないということは、ちょっと不思議なので、その点についてお教えいただけたらと思います。

【色音】　今、こういうふうにたくさんの研究所・研究機関がそれぞれでもホームページをつくっていることがあります。先ほども最後のところで見たとおり、中国社会科学院の日本文化研究所（http://www.cass.net.cn/y_qkzz/qkzz_07gj/qkzz_07_14/suo1.htm）とかはホームページを持っています（図１）。だから、そういう基礎があります。あと、中国



中国社会科学院日本研究所

(Institute of Japanese Studies,Chinese Academy of Social Sciences)

地 址：(100007)北京市东城区张自忠路3号东院・

电 话：(010)64014021・

传 真：(010)64014022・

成立时间：1981年5月1日・

简 介

中国社会科学院日本研究所成立于1981年5月，是中国社会科学院所属从事日本问题研究的国际问题研究所。研究所贯彻基础理论研究与现实对策研究并重的原则，通过开展研究工作，为推动中国的日本学建设，为增进中日两国人民的相互了解，促进中日两国友好关系的发展服务，为中国的改革开放和现代化建设服务。

机构设置

所 长：张蕴岭

副所长：孙叔林、蒋立峰、高增杰

研究室主任：日本政治室 高洪、日本经济室张淑英、 日本社会文化室 王纬、日本对外关系室 金熙德、日本科研处 郭颖、日本图资室石北屏、日本编辑部 韩铁英。

日本研究所现有工作人员49人，其中高级研究人员19人，绝大多数研究人员具备硕士和博士学位。日本研究所根据研究工作需要，聘请国内外学者作为特约研究员和兼职研究员。设日本政治研究室、日本经济研究室、日本社会文化研究室、日本对外关系研究室、《日本学刊》编辑部和图书资料室。管理中华日本学会和中华日本经济学会。

研究方向

図１　中国社会科学院日本文化研究所のホームページ

学術期刊全文データベースというものがあります。それをクリックしたら、このようにた

くさん出てきます。キーワードで探せば。これは学者それぞれの事情が違って、どんな資料に基づいているかというと、やはり日本語のものと中国語のものもあって、それと英語から訳しているものもあります。やはり中国では英語を読める人がかなりいますから、非常に不思議というか、例えば最近では、モンゴル国の研究もほとんどロシア語から使っているとか、いろいろな研究もあります。資料のもととしてはいろいろあると思います。その中で、かなりの人たちが日本に留学した経験がある方々が、こういう分野でやっているから、日本語の資料もたくさん使っています。

北京でも、この北京日本学センターという研究機関がありまして、非常にたくさんの資料がそろっています。それも公開して、ほとんど無料です。それは日本の国際交流基金がお金を出して、かなり寄贈しているのですね。買って贈っている。また北京図書館、今、国家図書館といいますが、そこには日本書庫というものがあります。日本で出版した本を出版社が送っているわけですね。新しく出版したら、それを送ってくる。だから、利用できる資料としてはかなりあるのですね。

【稲場】　データベースについては今教えていただいたのですが、そうすると論文のテーマが重なっているのが多いというのは、そのデータベースができたりする以前のことなのか、最近はそういった重複は少なくなってきているのか。

【色音】　それについての統計がちゃんとしていなかったのですが、今、このデータベースができたのは5、6年前からです。94年か、95年から2005年までの論文はほとんど入っています。だから、この中で直接ダウンロードできるものと、ダウンロードできないものもあります。画面でしか読めないものがあります。だから、こういう作業は、これから非常に進んで行きます。つい最近できた新しい雑誌の論文も見られるようになっております。例えば今、2006年ですが、2006年の1号とか、2号までは検索できるようになっています。

【司会】　ありがとうございました。まだ少し時間があるかと思いますが、どなたかありましたら。よろしいでしょうか。

やはり情報の交換、人と人の交流の両方が大切なことだと思います。それにつきまして、今、中国国内でのネットワークの確立の問題、それからさらに日本との研究協力の問題まで、いろいろご提言をいただきました。そろそろ時間がまいりましたので、よろしければ、終わらせていただきますが、よろしいでしょうか。

それでは、色音先生、どうもありがとうございました。（拍手）